

徳永 進

人と生まれ故郷の関係はさまざまだ。生の終焉(えん)と故郷、つまり、死と故郷の関係もさまざまだ。どれでなくてはならない、ということもないし、どれが良くてどれが悪い、ということでもない。が、故郷と人のあり方は、その人の人生の太い骨格の一つとなっているのも確かである。

著者の濱崎洋三先生は、鳥取に生まれ、鳥取で育ち、京都で大学生活を送り、鳥取に帰り、母校の高校で教員として働き、鳥取県史などの郷土史の第一研究者としての仕事をなし、最後は鳥取県立図書館長を勤め、二年前に鳥取で亡くなった人である。人と故郷の関係で言うと、先生は鳥取を初恋のように愛し、幸運なことに、二人を離させようとする力からは遠くに居続けることができた人だと思ふ。

この本におさめられた「私にとっての戦後」という、独自の知性を香りのように持つ文章の中で、先生は書いている。

「大声で叫ぶ人、人を動かそうとする人、そういう人達こそを信じてはならないと思いはじめた。(中略) 帰郷して私は高校教員の生活へと入った。若い生徒達と一緒に遊べることに、自分なりに郷土史の勉強ができることが、教員を選んだ理由であった。(中略) 不思議なことに関門院と呼ばれる生徒との出会いが多かった。さまざまに「はみだし生徒」とのつきあいが、私の教員生活を豊かにしてくれた!」。

この本の中には、先生が

疑う力が郷土史に新しい光

濱崎洋三著作集「伝えたいこと」

日ごろ思索していたことが、つまり、先生自身の考えがあちこちに記されている。ヨーロッパ、アメリカの考えの輸入品ではない、東京からの宅配便ではない、先生の中で育ち、収穫された独自の考え、思想である。

例えば、「平等主義は時に危ない。どこかにちょっと差別というものを隠蔽(べい)している」とか、「喜怒哀楽を伴わない空虚な言葉が、あまりにも教育の現場に氾濫(はんらん)しているように、私には思える。痛みと喜びをふまえた実感のある言葉こそ、教育の出発点だと私は信じる」とか、「故郷鳥取から疎外された鳥取村民の歴史は、アイヌ人を疎外していく歴史でもあった」とかである。

先生の考え方の根っ子にいつもあったと思われる一行を、本の中に見つけた。「果たして本当にそうであったのか。先生はいつも疑いながら、社会を、教育を歴史観を見つめてきた。戦争がそういう人物を故郷に育てたのだろう。疑う力が郷土史に新しい光を与え、史料を発見させ、人に残せない業績を残させ、人にできない発想を残させたのだろう。」

先生は、「人類には二種類

類しかない。それは男と女だというのが私の持論である」と書いている。そういう勝手な分類でゆくと「本には二種類しかない。売れる本と売れない本だ」。いや、そうではなく、「本人が出したがる本と出したがらない本だ」であろう。先生の本は後者である。

そもそもが、ちやほやされて依頼原稿を書くことなど、最も禁じていた人である。本を出すなどと言った強い抵抗をされたに違いない。「阿呆(あほう)だな」とするな。自己満足にすぎん。資源の無駄だ」と。この本がで上がったのは、死のおかげだった。先生の死によって、多くの人が先生の思想を手にすることができる。そういう意味でも、独自の本である。この本を作ろうとした仲間



濱崎洋三著作集『伝えたいこと』の表紙

(内科医)
 (B6判、四四二頁、二八〇〇円、濱崎洋三著作集刊行会発行、発売所は鳥取市元町の定有堂書店)